

アンクル・マンデー

ゾラ・ニール・ハーストン

アンクル・マンデーに関する話はいろいろあるが、皆、その話が本人に伝わらないように気を配っていた。アンクル・マンデーは紛れもなく、魔術を使う医者である。それだけで皆が気をつけて彼の話をすることが分かるが、彼にはヴードゥー以前にさかのぼって関係している何かがあるのだ。彼のことを知る人は誰ひとりとしておらず、それは、たとえ四十年以上そこに住む人であっても、三百人足らずの村における重大な事柄であるのだ。

アンクル・マンデーがどこからやってきたのか、どのような家系であるのかを知る人はおらず、この町に來た正確な時期を知る人もいない。ある日、夜が明けたら彼が居たのだ。アンクル・マンデーに初めて会ったのは、ジョー・リンゼイである。ジョーは亀の釣り糸をベル湖に仕掛けた。その湖の周りには多数のヒルやマムシが

いて、陰鬱な雰囲気をまとう湿地であるため、釣りには不向きな場所である。いったんヒノキの道を越えて舟をこぎ出すと、深みが広がるが、そこには多数のワニが生息しているため、たいていの人はそこで鱒を釣ろうとは思わない。しかし、ジョーは亀の釣り糸に餌をつけ、湿地に入らずに、できるだけ遠くへ釣り糸を投げた。そして、翌朝、夜が明けるとできるだけ早く、仕掛けた釣り糸を見に出かけた。それぞれの釣り糸に亀の頭がついていて、獲物を食ったワニをのしりながら釣り糸を引き上げた。ジョーが言うには、彼は家路につき始めたが、釣り糸を仕掛けた場所から数ヤード離れると、何かに振り返させられ、倒れて死にそうになった。二本のヌマスギの間の湖から歩いて出てくる老いた男がいたのである。水中を歩くには深すぎたし、その男は水中を歩いていたのではなく、まるで乾いた地面を歩くように力強く歩いていた、とジョーは言う。

リンゼイは恐怖のあまりそこに立っていられなくなり、その男に追いつかれてしまい、非常に怖くなって足を動かさなかった。そのため、リンゼイはただそこに立

ちすくみ、男が湿地の細長い道を渡り、自分の後ろにある小道に来るのを見た。リンゼイは、男が近づくにつれて、髪が逆立つのを感じ、なぜか近づいてくるワニのことを考えた。しかし、リンゼイがその朝ワニの事を考えたのは、まず、この湖のワニの荒々しいけんかや大きな唸り声を一晚中聞き、亀の釣り糸が奪われたからである。さらに、誰もがベル湖にワニの親が生息していることを知っているからである。

その老人はまっすぐに歩いてきたが、それはまるで、体に対して足の長さが足りず、腕と一緒に動いているかのように、短くて早い足取りであつた。リンゼイは、地面の上に立ち、自分がその男を恐れていると悟られないようにするので精一杯であつたが、とにかく、なんとかじつと立っていたと言う。見たところ、男は彼を見ることなく、通り過ぎた。男が通り過ぎた後、リンゼイは男の衣服が完全に乾いていた事に気付いたので、見間違えたのだと思い至つた。その老人は舟に乗ってヌマスギまで来て、根っこから根っこへと伝つて湿地を渡つたに違いない。しかし、見

に行ってみると、渡りやすい根っこは見つからなかった。それに加えて、湖には舟もなかった。

その老人は誰にとっても奇妙であつたが、依然としてリンゼイの話を信じる人は誰もいなかった。リンゼイはただ、別の物を見ただけなのだと周囲は思った。つまり、その老人は湖の方向からやってきたのを目撃されたというのだ。これが村人が彼を初めて見た出来事で、一八八〇年代後半にまでさかのぼるが、今のところ、これ以上にその男の過去を知る人はいない。それで村人たちは不安に思っているのだ。村人たちが他に気味が悪いと思っていることは、その男が名前や土地について、一度も尋ねなかったことである。それでも、男は村人の全員を知っているようで、正しく名前を呼んだ。村人がどこに住んでいるのかも知っていた。村での方法で暮らしを立てることはなかった。彼は白人のために園芸や、狩り、釣りをすることもなかった。彼は自分で建てた小さな丸太小屋の近くに居たが、彼の姿が次々に目撃されるようになる前に三週間ほど経った。

ジョー・クラークは、その男の名前がマンデーであることを知った人物である。他に名前はない。そのため、まもなく町の人々は彼をアングル・マンデーと呼ぶようになった。彼がヴードゥー信奉者であることがどのように知れ渡ったのかは定かではない。しかし、彼がヴードゥー信奉者であることは明らかになった。世間は彼をよい人だとも言うようになった。彼は恐れられるのと同じくらい、多くの仕事を持っていた。何年もアント・ジュディが独占してきた重要な仕事を彼がすべて取ってしまうのに長くはかからなかった。

彼は町へ来た時には非常に年寄りだった。非常に年寄りだったが、しっかりといて力強かった。病気をこぼすこともなかった。

しかし、かつて早朝にエマ・ルー・ピットマンが用事でアングル・マンデーの丸太小屋に行った際、恐ろしい話を持って走って戻ってきた。エマは彼の家のドアと階段に、重々しく引きずった跡を見つけ、それはまるで流血した死体が引きずって入れられたかのようなだったと言った。ドアに少し隙間があり、エマは大きな唸り声

や、大きなあごが噛みつく音を聞いた。それは正確に言えば唸り声ではなく、低い調子の抑えられたうなり声のようであった。彼女はドアを少し開け、野獣か何かがそこでアングル・マンデーを襲っていないかどうかを確認した。アングル・マンデーがドアを半開きにしたまま眠ってしまい、オオヤマネコか、ヒョウ、あるいは、ボブキャットが中に入り込んだのかもしれないと思ったのだ。アングル・マンデーはブルー・シンク湖の近くに住んでおり、ワニが家の中に入ってくる可能性があったが、エマはワニが犬以外の跡をつけていったことを聞いた記憶はなかった。

しかし、いない。家の中には野獣はいなかった。エマが聞いた物音はアングル・マンデーが立てた音であった。彼は松の葉の粗末なベッドに横たわり、正気を失った目で苦悩の表情を浮かべていた。彼の右腕は恐ろしいほどめった切りにされていた。実際には右の肘から下が引き離されていたのも同然であった。彼の顔の片側もひどく引き裂かれていた。エマは彼の名を呼んだが、その声は聞こえていないようであった。そのため彼女は誰かにアングル・マンデーの手当をしてもらうため、急

いで戻った。すぐに何人かがやってきたが、家が外から施錠され、ノックへの応答がなかった。もし血の跡がなければ、ピットマン夫人は、ひどい嘘つきだと言われただろう。そのため、その場にいた人たちは、アンクル・マンデーは何らかの原因で傷を負い、体を引きずって自力で家に入ったか、友人に引きずって入れられたのだと判断した。しかし、誰が彼の友人だったのだろうか。

その後ひと月、誰もアンクル・マンデーを見かけなかった。ほぼ毎日、誰かが立ち寄って、アンクル・マンデーの皮か頭髮が落ちていないかどうかを確認した。一ヶ月が過ぎようとする前に、出来事が起こった。町はアンクル・マンデーがやってきたのと同じように不思議に立ち去ったと決めようとしていた。

ある夕暮れ過ぎのころ、サム・マーチャントとジム・グッデンは、ベル湖周辺のリス狩りからの帰途についていた。二人の話によると、彼らは湖を周り、町へつながる小道に近づく、その湖に生息していると思っていた大きなワニが這って湿地から出てくるのを見た。マーチャントは、ワニの皮と歯を狙ってそのワニを撃ちた

かったが、グッデンは鳥獵用散弾を装填しており、撃つてもワニの皮を貫通できず殺すこともできないと、マーチャントに考え直させた。彼らがワニだと思い込んだものは、黒い長い手袋のように見える何かを外しながら、しばらくもがいた。それから、ワニはかぎ爪のある足で柔らかい土に穴を掘り、右手から取った手袋を丁寧に埋めた。そして、右も左も見ずに、ワニは直立して、村の方へ歩いていった。皆はアンクル・マンデーが町へ来るのを見たが、やはりマーチャントの話を鵜呑みにできなかった。しかし、人々は次第に、アンクル・マンデーは傷を負った体の一部を落とし、その代わりを新しく再生させることができるのだと信じるようになった。とにかく、アンクル・マンデーが再び現れた時、右手と腕の傷はなくなっていた。村では彼の死に懐疑的でさえある。かつてジョー・クラークがアンクル・マンデーに言った。「なあ、アンクル・マンデー、その歳で一人でいるのは怖くないのかい？」

アンクル・マンデーは尋ねた。「なぜ私が怖がるんだい？」

「いや、あなたがいつか夜に病気になるそうだし、あなたが病気だったと知る前

に、死んでしまうかもしれないでしょう。」

アングル・マンデーは釘を入れる樽から立ち上がり、すぐそばにいる者にだけ聞こえるようなとても低い声で言った。「私は何年もの間、死んでいたのだよ。私は君たちが行く場所から戻ってきたんだ。」そして、アングル・マンデーは、素早く短い歩幅で、腕は肘のところで曲がり、足の動きにあわせて歩き去った。

アングル・マンデーは、世界で最も強力な「手」で、最も偉大なお守りである、歌う石を持っていると思われていた。その石はダイヤモンドで、蛇（一般的な蛇とは異なる何かとして考えられているものである）の口から出るものであり、ダイヤモンドの中のダイヤモンドである。それは他の光なしで家の中を照らすだけではなく、持ち主に接近の警告もする。

これらの石を生み出す蛇は、メートランド湖の深い場所で生息している。この湖には小さな島があり、珍しい植物が生育しているが、その植物がこの蛇の唯一の餌になっている。その蛇は人間がいないことをはつきりと確認すると、激しい雷雨の

極致の中で、餌を食べに出てくるだけである。

その蛇を殺したり、捕まえたりすることは、九人の健全な人が悪魔とともに先んじて方法を講じない限り不可能で、征服しようと企てたらさらに多くが死ぬことになるだろう。しかし、石を得るために、蛇を殺したり、捕えたりする必要はない。ふたつ持っているからだ。ひとつは蛇の頭に埋め込まれており、もうひとつは口の中に入れて運んでいる。一番目の石は蛇を殺さない限り取することはできないが、二番目の方は策略で奪えるかもしれない。

蛇は石を口に入れて移動するので、それを口から出すまではものを食べることができない。石は蛇に危険を知らせる案内人なのである。そのため、餌を食べるため島へやってくると、蛇は餌を食べに島の反対側へ行く前に、石を吐き出して地面の中に隠す。

このダイヤモンドを得るために、黒のベルベットで身を包む必要がある。補佐役の者も同じ格好になることが必要だ。ベルベットで包まれた鉢を持っていく。嵐が

最も大きくなる前に島に入るが、補助役の者には舟に残ってもらい、自分を拾ってもらう準備をして、合図があり次第すぐにその場を離れるように言うのだ。

高い木に登って蛇が来るのを待つ。蛇は水から上ると、周囲を見渡して誰もいない事を確認する。自分以外誰もいないことを確認すると、蛇は石を吐き出し、砂でそれを覆って、餌のある場所へ向かう。そのため、蛇がせつせと餌を食べていることが確認できたら、できるだけ素早く木から降りて、石が隠されている盛り土を、内側にベルベットを付けた鉢で覆い、一目散に舟に退避する。舟の漕ぎ手は全速力で島から離れなければならない。石に近づくとともにチャイムのような音がして、蛇がその音を聞くだろう。すると蛇は石を守るために急いでくる。蛇はその場所に戻ってくるが、ベルベットで覆われた鉢で見えない。蛇は激怒し、大きな木々をなぎ倒して、ハリケーンのように島に激しく打ち当たるだろう。石を取りに戻るのは落ち着いた日まで待つ。蛇は穏やかな天気の際は湖の底から上がってくることはない。さらに、口の石を失った蛇は、その後は単独で餌を食べに来ることはできない。

仲間を連れてこなければならぬのだ。口の石は蛇たちの守護者で、それを失くしてしまうと、歌う石を持つ蛇を伴わないと、絶え間なく危険にさらされてしまうのだ。

アンクル・マンデーは歌う石を持っていて、それゆえに、何も話してもらわなくても、彼はすべてを知っている、と人々は言う。

アンクル・マンデーが石を持っていようがいまいが、彼がヴードゥーの力を秘めていることを誰も疑わなかった。彼は恐れられていたが、無力な人に生命が強くなりすぎる時、彼は捜された。メアリー・エラ・ショーは、ジョー・ネイサン・モスとの結婚式を、その前日に取り消した。ジョー・ネイサンは家の家具を備えつけ、食糧も持ち込んでいた。ジョー・ネイサンの家族も、メアリーの家族も、皆、メアリーに彼と結婚させようとした。彼はメアリーをとて愛しており、それに、結婚のために少ない財産の多くを使ったのだ。しかし、メアリー・エラは結婚しようとしなかった。彼女はキャディー・ブルートンに会い、判断に迷ってからは、心を平

穩に保つことができなくなった人々の一人であつた。

そのため、ジョー・ネイサンの母親はアンクル・マンデーに会いに行った。アンクル・マンデーは言った、「メアリーは心が判断についていく種類の女性であるから、蛇の噛み傷が治るにまかせましょう。家へ帰りなさい。彼女を引き留めておける男性はいないでしょう。彼女は男性であふれた世界を手に入れることができますが、月が次の満月を迎えるまでひとりの人といふことはないでしょう。」

十五年が過ぎた。メアリー・エラは四度結婚した。彼女はとても可愛い女の子で、いつも男性が言い寄ってきていたが、誰も二十八日以上、彼女と一緒にいることはなかった。さらに、四人の夫の他に、数週間の間に、一度に何人の男性と関係を持ったのかは分からなかった。彼女は父親の異なる八人の子どもがいるが、未だに夫はいない。

ジョン・ウエズレー・ホーガンは、もう一人の恋愛に一方的な人物である。彼の告白や経験によると、八歳から八十歳の女性が彼の相手になったが、彼に結婚させ

ようにするほど賢い女性は生まれておらず、その母親は死んでしまった。女性と母親は彼を毘にかけることができなかったし、脅すこともできなかった。

それでも、ブラッドリー夫人はデインキーのことで彼のもとにやってきた。ブラッドリー夫人はデインキーを職場から呼び寄せて、こう言った。「ジョン・ウエズレー、私は未亡人で、私の前で戦う人がいないので、私と私の子どものために話をしようと思います。私は慎重深く来ていて、嘲笑の標識に娘の名前が書かれる前に、どうやって話を進めて、あなたに娘と結婚するよう頼むかを分かっています。」

そのことでジョン・ウエズレーが怒らなかったとしても、彼にとってそれはおかしなことであつただろう。そのため、彼は軽蔑する様子で彼女に尋ねた。「ああ、あなたは私をどう思っているのでしょうか？娘と一緒に立ち去るべきだ！デインキーがこれまでどんな男と遊んできたか、どうして僕が知っていると思つているんですか？あの娘を僕に押しつけようとしなくてください。僕はずっと北部の人間なんだ。私はあなた方のような馬鹿ではない。僕のことはビッグ・ボーイだと考えてくれよ。」

彼らはファット・サムの後にビッグ・ボーイに撃たせ続けたから、この世界からもう愚か者はいなくなつた。ははは！女性全員に会つたのさ！猿が象に話すように僕はあなたに話すでしょう。ビッグ・ボーイの僕にほらを吹くのはやめてくれよ。もしディンキーをなんとしても結婚させたいのなら、この町の道化者のひとりをつかまえることだね。僕はその人ではないよ。保安官長のところへ行つても無駄だよ。僕よりディンキーの方が男と付きあつてゐることを証明できる目撃者がいるからね。」

ブラッドリー夫人は保安官を悩ますことはなかつた。ただ保安官ができることはジョン・ウエズレーとディンキーを結婚させることであつた。しかし、インタビューが終わる時には、打ちひしがれた母親の望みは結婚させることではなくなつてゐた。そのため、彼女は暗くなるのを待つて、アンクル・マンデーのところへ行つた。皆、アンクル・マンデーには出来事を説明しなくてもよいと言う。ただそこへ行き、到着すると、アンクル・マンデーの準備は整つてゐるのだ。そのため、彼はブ

ラッドリー夫人を、壁に掛かっている大きな鏡に面したテーブルに腰掛けさせた。彼女が言うに、アンクル・マンデーは装填された銃を持っており、目の前のテーブルには大きな短剣が置かれていた。彼女は両方の武器を見たが、どちらを使いたいかを決めかねた。何も言わずにアンクル・マンデーは、一杯に水が入ったひょうたんを彼女に手渡し、彼女はそれを飲んだ。水が舌に広がるやいなや、彼女は銃を手にとった。アンクル・マンデーは鏡の方を指さした。ゆっくりと、ジョン・ウエズレーの姿が鏡の中に現れ、ついには鮮明な人間として彼女の前に立った。彼女は注意深く照準を定め、発砲した。鏡が粉々にならなかったことに彼女は驚いた。しかし、大きな銃声と薄青い煙が上がり、鏡の中の姿は消えていた。

帰り道で、ブラッズルは彼女に、ジョン・ウエズレーが急死し、ワトソン氏が彼の棺を調達するために、翌朝オーランドへ車を走らせることを約束したと言った。

アント・ジュディ・ビッカースタッフ

この辺りで、アンクル・マンデーは唯一のヴァドゥーの医者ではなかった。アント・ジュディ・ビッカースタッフがいた。彼女はアンクル・マンデーが来る前からそこにいた。もちろん、職業的な嫉妬が起こるのに時間はかからなかった。アンクル・マンデーはアント・ジュディを気にしているようではなかったが、彼女の方はアンクル・マンデーを恨み、その感情を隠せなかった。

このことは、アンクル・マンデーが来るまではアント・ジュディがこの辺りのすべての「手」を作っていたことを考えれば自然なことだが、アンクル・マンデーはすぐにその仕事の大部分から手を引いた。

何年もこの感情は続いた。いつも、小さな出来事が競争を悪化させた。マンデーは最高の立場にいたが、ジュディも勝利しないわけではなかった。

とうとうジュディはマンデーが鎮めたことは何でも覆せると言い始めた。ただ覆すだけではなく、それを、マンデーの依頼人は言うまでもなく、マンデーに投げ返すことができると言ったのだ。誰も彼女のほら話をマンデーに話さなかった。とに

かく人々は用事以外のことをマンデーと話すことは決してなかった。おそらくジュディはそのためにほら話をして問題ないと思っていたのだ。

そしてある日、ジュディは突然釣りに行こうと思いついた。子どもと孫はジュディにやめるように説得した。子どもたちはジュディの年齢と関節の硬さを理由に説得した。しかし、ジュディは孫に鱒用の竿と餌の竿を調整させ、村で限りなく深いと言われているブルー・シンクに向けて出発した。さらに、彼女は日没近くまでは出発しなかった。同行者を求めなかった。話すことに意味はなく、ジュディはただ、ブルー・シンクに釣りに行かなければならないという気持ちだった。

ジュディは夜になっても家に戻らず、家族は少し心配した。しかし、ひと休みしておしゃべりをするのに、友人の家に立ち寄ったのだろうと考えたので、すぐにジュディを探しに行かなかった。しかし夜が更けても彼女は戻らなかったで、子どもたちは探しに出された。

ジュディは村にいなかった。ブルー・シンクで彼女を探す一団が組まれた。一団

が彼女を見つけたときは夜の九時を過ぎていた。彼女は湖の中にいた。浅瀬に横たわり、年老いた頭を肘で支えて水面から出した状態でいた。息子のネッドは、たいまつを母親の頭の上に向けたら大きなワニが離れていくのを見たと言った。

子どもたちはアント・ジュディを家へ運び、可能な限りあらゆる手当てをした。

彼女は足を引きずって使えなくなっており、三日間、一言も筋の通る言葉を発することがなかった。一週間ほどしてどのように湖に入っていたのかを話せるようになった。

彼女は、本当は釣りに行きたいとは思っていなかったと言った。家族と村人は、彼女が湖の周りをぶらつくのを見たことはなかった。しかし、その午後、彼女は行かなければならなかったのだ。なぜかは分からなかったが、行かなければならないことは分かっていた。釣り針に餌をつけて、魚がかかるのを立って待っていた。彼女はリューマチのために、湿った地面に座ることを懸念した。魚はかからなかった。日が沈んだ時に帰りたいと思っただが、なぜかその場所を離れられなかった。彼女は

恐ろしく、ひどく恐ろしかったが、離れられなかった。

とうとう日が落ちて、暗くなったときに、あたりに威嚇的で、強力な邪悪さを感じた。彼女はその場所から動けなかった。すぐ足元に小さいが強力な旋風が巻き起こった。彼女は恐ろしい何かに襲われ、水の中に倒れた。そこから上ろうとしたが、足が使えないことに気付いた。彼女はワニやカワウソ、ヒル、そしてガーがいると思ひ、誰かが助けにきてくれるかもしれないと思ひ、叫び始めた。

突然、赤く光る棒が、湖の一方からもう一方を横切った。それは火の剣のようだった。そして彼女は、アンクル・マNDERがこの燃え立つ道を通って湖を歩いて彼女のもとへやってくるのを見た。その赤い道の両側に、将官の後ろにひかえる軍隊のように、何千ものワニが泳いでいた。

光そのものが恐ろしかった。それは赤いのだが、彼女はかつてそのような赤色を見たことがなかった。光は絶えず跳ねて動いていたが、湖を横切って常にまっすぐに、どうすることもできずにいる彼女の方を指していた。湖は一マイル近くの幅が

あったが、アント・ジュデイが言うには、アンクル・マンデーは一分もかからない内にそこを渡り、彼女の前に立ったという。彼女は恐怖で目を閉じてしまったが、まぶたから彼を見た。

すぐに彼女はもう一度叫んだ。するとアンクル・マンデーはどなり、彼女に飛びついた。「黙れ！」と彼はどなった。「もう一度でも口を開いたら、それがお前の最後の息だ！お前はほら話のせいどこへ来ているのであって、私の力を認めるまでここにいることになるだろう。さあ、お前は私の業を投げ返すのだろう？私がお前を湖に入れたのだ。お前の力を見せて出てみなさい。死にはせず、私がお前の主人であることを心から認めるまで、お前はこの場所を離れないのだ。お前が屈服したら、すぐに助けが来るだろう。」

彼女は彼と戦った。自分の祭壇の前に立てば、彼にすごいものを見せてやれるだろう、と彼女は感じた。彼はしばらくの間彼女をにらみつけ、振り返って、湖の中の来た道を戻った。光が彼の足の後ろで消えた。すると彼女が震えて動けなくなっ

ている場所の側に大きなワニが上ってきて、彼女は力のすべてを失ってしまった。彼女は自分の力に対する自信をすべて失ってしまったのだ。死んでしまうか、この恐怖から逃れられさえすれば、二度と他の魔術に触れることはないだろうと感じた。側にいる怪物に食べられることから逃れられさえすれば、と思った！食べられて死ぬことは逃れたかった。彼女はアンクル・マンデーに助けを請えるよう、彼に戻ってきてほしいと思った。彼を呼ぶために口を開けたが、話す言葉が出てこなかった。しかし、岸から光が近づいてくるのが見えた。救出の一団であった。

アント・ジュディの足は完全に使えるようには回復しなかったが、家や庭をよろよろと歩ける場へ着いた。ブルー・シンク湖での経験を話した後、彼女は二度とアンクル・マンデーの名前を出すことはなかった。

村の人々は、常にこの点に気をつけ、彼女と同じくらい注意深くなった。しかし、時々、ベル湖に住むと皆が知っている、大きなワニが曇った夜にうなっているのを聞くと、アンクル・マンデーの家のおよその方角を親指で指して、誰かがこうささ

やく。「今夜はオールドボーイが家族を訪ねているな。」

訳者あとがき

小林 亜由美

Their Eyes Were Watching God（一九三七年出版）の作者として知られている Zora Neale Hurston（1891-1960）は、一九三〇年代から六十年代の三十年ほどの間に、七つの小説に加え数々の短編や雑誌記事、劇を執筆したアメリカ黒人女性作家・民俗学者であり、ハーレム・ルネッサンスを代表する作家の一人である。一九七五年に Alice Walker によって再評価されて以来、研究が一層深まってきた作家であるが、イギリス人女性である Nancy Cunard が編纂した黒人やその文化を擁護するアンソロジー *Negro* にハーストンがその寄稿者の中で最も多い六編のエッセイを寄稿していることは、日本であまり知られていない。ここで訳出した「マザー・キャサリン」と「アンクル・マンデー」はそのなかの二編であり、『ニグロ』が初出である。ハーストンは『ニグロ』への寄稿の依頼を一九三一年の秋に受けたが、当時はパ

トロン Charlotte Osgood Masonのもと、民俗学者として黒人文化の資料を収集する傍ら、劇作家として活動しており、自身の収集した資料を出版する機会を待つ状態であった。また、当時は大恐慌の最中で、ハーストンも経済的に苦しい状況にあった。ハーストンはパリで黒人に関するアンソロジーを出版しようとしていることを記すキュナードからの手紙を矢継ぎ早に三通受け取り、メイソンの許可を得て寄稿を引き受けた。そして、ハーストンはキュナードの代理としてやって来た作曲家の George Antheil に原稿を託した。ハーストンが『ニグロ』に寄稿したエッセイは、黒人文化を詳述する内容であり、ハーストンにとっては民俗学者としての調査結果が出版されることになったものである。ハーストンはこの寄稿によって自身の人生に変化が起こることを期待していたようである。ただ、実際には出版が依頼の三年後の一九三四年であったことで、社会的にも経済的にもすぐに変化が起こるには至らなかった。

「マザー・キャサリン」と「アンクル・マンデー」は、ヴードゥー教についてハ

ーustonが取り組んだ現地調査のエッセイであるが、ハーストンは一九三八年に出版された *Tell My Horse: Voodoo and Life in Haiti and Jamaica* でヴードゥー教についての調査結果をまとめている。「マザー・キャサリン」と「アンクル・マンデー」はこれに先立って出版されたエッセイであり、ハーストンの民俗学者としての活動のみならず、その後の作家としての活動の原点として注目に値するだろう。

最後になりましたが、翻訳の機会をいただき、投稿までお世話になりました水野尚之先生、編集長を務めてくださった高橋一馬さん、文芸表象論分野の院生の皆さんに、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。